

小学五年

国語

解答と解説

1

問一	ア	21
問二	イ	22
問三	エ	23
問四	エ	24

問五	A	25
学校		
校	便	26
便	り	
り	B	27
B	マ	
マ	グ	28
グ	ネ	
ネ	ツ	29
ツ	ト	
ト		25

問六	ア	26
問七	ウ	27
問八	夜	28
中	ま	
ま	で	29
で	ゴ	
ゴ		29
問九	ウ	

問十	新	30
品	と	
と	見	
見	間	

問十一			31
取	り	芳	
れ	っ	男	32
て	ぱ	の	
、	に	知	33
う	成	ら	
れ	長	な	34
し	し	い	
く	て	う	35
思	い	ち	
う	る	に	36
気	こ	も	
持	と	、	37
ち	が	弘	
。	感	樹	38
	じ	が	

2

問一	エ	35
問二	イ	36
問三	雑	37
草	の	
の	生	
生	育	

	<b>5</b>	<b>4</b>	<b>3</b>			
⑥	①	①	①	問十	問五	問四
銅像	領空	ウ	ウ	命	雨	A
		51	46	あ	が	何年
61	56	②	②	る	少	も
⑦	②	52	47	も	<small>(未完)</small> 口	放棄
志望	綿雲	③	③	の	ツ	B
		53	48	問十一	パ	雑草
62	57	④	④	イ	問六	だらけ
⑧	③	54	49	エ	工	<small>(未完)</small>
過	防火	⑤	⑤	<small>(完答)</small> 問七	ア	38
		55	50	<small>(順不問)</small> 問八	イ	
63	58	ウ	ア	問九	ウ	
⑨	④			40	41	
罫	報道			42	43	
64	59					
⑩	⑤					
満	打破					
65	60					

(配点)

{ ①〔問十一〕 8点、他各5点  
 ②〔問六〕 2点、他各5点  
 ③④⑤各2点 } 計150点

【解説】

1 石川結貴「靴」(「小さな花が咲いた日」所収 ポプラ社)

から出題しました。思春期の息子との距離感に悩む父親の視点で描かれた物語です。父親の心情をその表情やしぐさ、行動を通していいねいに読み取りましょう。

問一 B1 理由 比較

——線①直前に、「ぼそりと上がった声に」とあり、直後に「ついこの前、声変わりが…男っぽい声に変わっている弘樹の成長が…奇妙に感じる」とあります。また、——線①の三行後に「急によそよそしくなり…今ではめつたに口もきかず、目も合わせなくなつた」ともあります。ですから、答えはひさびさに聞いた弘樹の声が大人の声になっていることに驚いていることが示されているアです。イ「長かった反抗期がやっと落ち着いた」「親しげに話しかけてきた」、エ「弘樹のよく響く太い声」の部分が本文からは読み取れません。ウ弘樹の声変わりにふれられていませんし、弘樹は芳男と「話をしたい」から話しかけたわけではありません。

問二 B1 理由 比較

弘樹に対する質問でも、母親である美佐江が先回りして答えることについて、「出しゃばるのがうまい」と言っていることから、芳男は、弘樹自身のことには弘樹に任せろべき、語らせるべきだと考えています。それなのに、「独壇場のように早口でまくし立て」て答える美佐江につられて、「美佐江に顔を向けて」しまい、弘樹のことを美佐江に答えさせるのを容認してしまいました。このことを「うっかり」と表現している

のでしよう。ですから、答えはイです。ア「美佐江の説明が非常に簡潔でわかりやすかった」「効率的だと思ってしまうた」、ウ「感心してしまった」、エ「美佐江に間に入ってもらおうと思つた」の部分が本文の内容からは読み取れません。

問三 A2 知識 比較

③の直後に「余計なことを言ったせいで、妻の機嫌を損ねただけでなく…形無しだ」とあります。この中で余計なことをしたり、口を出したりして、かえってめんどうをひきおこす、という意味のことわざは、エのやぶへび(藪をつついてへびを出す)です。アのたなぼた(柵からぼたもち) 〓 何もしないのに、思いがけない幸運に出あうことのとえ。イのちりつも(ちりもつもれば山となる) 〓 ほんのわずかなものでも、つもり重なれば大きなものになるといふたとえ。ウのどろなわ(どろぼうを捕らえて縄をなう) 〓 困つたことがおきてからあわてて用意するたとえ。

問四 B1 具体化 比較

——線④の五行前からはじまる、美佐江のセリフに注目しましょう。「パパってなんにもわかってない…ほんとならパパが厳しく言ってくれたらいいのに」とあります。美佐江は、芳男は父親のくせに息子のことがわかっていない、父親としての責務を果たしていない、と言っているのです。ですから「息子への威厳」が傷ついたというのには、そんな言われっぱなしの場面を息子に見られて、父親としての芳男の力が弘樹から大したことないと思われてしまう、ということを行っているのだと考えられます。ア・イは芳男が弘樹からどう思われる

かということに触れられていません。ウ「弘樹の顔色をうかがってばかりの」の部分から読み取れません。

問五 B1 具体化 関係づけ

——線⑤の直前に、「学校便りの白いコピー紙を軽くこぶしで叩くと、コツンと音がしてマグネットが床に落ちる」とあります。「学校便り」は、芳男が「毎週欠かさず目を通していた」もので、それを見て弘樹がなにをするのかを把握し、弘樹の成長を願っています。つまり、学校便りに目を通すことは、弘樹を理解するための術であり、自分が父親として、弘樹を愛し見守ることができていると感じられるものでもあったのです。芳男が、弘樹とうまくコミュニケーションがとれなくて不甲斐なさを感じている時に、その「学校便り」と、それを止めていたマグネットがちよつとした反動で「床に落ちたのを見て、自分の弘樹への関わり方に対する自信がゆらいだのだと考えられます。」

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問六 B1 具体化 比較

美佐江が何を言いたいのか、彼女のセリフを読みます。「最近のあの子、おかしいのよ」と言っていますから、思春期の弘樹の様子を伝えたいのだな、とわかります。また、セリフを読み進めていくと、自分がいかにそのことで手を焼いているか、迷惑をこうむっているか、という話になっています。美佐江が苦勞しているということも伝えたいのでしょう。「この際だから、言わせてもらうけど」という前置きから、今か

ら言うことは芳男に言えずに我慢していたことだ、芳男は何もわかっていない、という思いが読み取れます。以上のことから、答えはアです。イ「非行の道へ進んでいっている」、ウ「甘えて頼り切っている」、エ「芳男の前ではいい子ぶっている弘樹」の部分から本文の内容から読み取れません。

問七 B1 具体化 比較

——線⑦の三行前に「あれは、私が言わせたのよ。そのくらい自分で頼みなさいって、ちゃあんと叱っておきました」とあります。ここから、美佐江の「自分は芳男とはちがつて、親として、弘樹のことを知っているし、指導もできている」という自負が読み取れます。ですから答えはウです。アは親としての働きに触れていません。イ「弘樹から：絶対の信頼を得ている」の部分の不適切です。エ「弘樹の気持ちによりそって」、先回りしたり叱ったりしているわけではありません。

問八 B1 関係づけ

⑧の二文前に、「弘樹の部屋から細い明かりがもれていた」とあります。これは、弘樹が夜更かしをしている、ということを意味しています。また、⑧の後に「そう話した美佐江に父親らしさをアピールするのなら：何してるんだ、と声をかければいいのだろう」とありますから、美佐江のセリフの中から、弘樹が夜更かしをしている、と同意の表現を探します。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問九

**B1** 具体化 比較

——線⑨の直前で「ドアノブに手をかけ逡巡した」とあります。芳男は、「美佐江に父親らしさをアピールするのなら」弘樹の部屋のドアを開け、夜更かしをしている弘樹に注意すればいい、とわかっています。しかしそうすることをためらっています。それはなぜかを考えましょう。「ドアに『親』と書いてみる」というのは、芳男が「親とはどうあるべきか」を考えている、ということでしょう。そこで出た結論が、——線⑨の直後にあるように「木の下から支えてやりたい」です。芳男は、少し離れたところでは何かあった時の支えとなる父親になりたいと考えていることがわかります。だからドアを開けて口うるさく注意することをためらったのでしょう。ですから、答えはウです。ア「父親らしく、夜中まで起きている弘樹を叱るべきだとわかっている」の部分が不適切です。芳男は「父親らしさを美佐江にアピールするには叱るのがいい、と思っているのです。イ「これからは父親として弘樹と積極的に関わっていくべき」、エ「弘樹に嫌われるのが怖くて弘樹の勝手なふるまいも許してきた」甘やかさず育てていきたい」などが本文からは読み取れません。

問十

**B1** 具体化 関係づけ

——線⑩から、芳男がこれほど興奮しているのは、「靴を履くとき」に何かに気づいたからだというのは読み取れます。——線⑩の直後に「カバンを手にしたまま：美佐江に『おい』と大声を出す。：『弘樹はどうした』：『じゃあ、おまえか。あの靴は』という一連の流れから、靴が興奮の原因だとわかります。芳男をこれほど興奮させた靴について書かれた一文

を探しましょう。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問十一

**B2** 具体化 推論

——線⑪に「こうして親を追い越していくのかな」とあるように、弘樹が靴を磨いてから返してきたことに、芳男は弘樹の成長を感じていることがわかります。また、——線⑪の直後に、「弘樹の体温が：爪先がじんわりと温かい」とあることから、弘樹の成長にしみじみと喜びを感じていることもわかります。この二点が押さえられているのが採点のポイントになります。どのような気持ちか、と問われているので、「気持ち」の形で答えましょう。

※設問の指示や字数・文字指定に従っていないものは不正解とします。ただし、誤字脱字が一つの場合は減点1点、二つある場合は減点2点、それ以上は不正解とします。また解答の説明に過不足がある場合は減点3点とします。

**2**

稲垣栄洋「競争『しない』戦略」(扶桑社) から出題しました。日本人は「雑草」に良いイメージを持っていませんが、ヨーロッパはもろろん、他のアジアの国々の人々はそうではありません。それは、日本人が雑草を作物の成長を邪魔するものではあるが、一方で利用価値のある資源だと考え、利用してきたからです。日本人は物事には「良い面と悪い面」があると考えるのです。そのことについて、前半部分で欧米人の「雑草」のとらえ方と比べながら説明されています。後半では日本には、植物を供養する習慣があることについて書かれています。

ます。それは昔から日本人は植物も自分たち人間と同じく、命あるものだと考えてきたからです。このようなものの方、命の感じ方をしてきた日本人には今でも雑草をもいつくしむ感覚が残っています。

問一 **A2** 知識 比較

① 直後に、「つまり、ウイードが：『やっかい者』とか『嫌われ者』という意味なのである」とあります。ですから「雑草は死なない」とは「嫌われ者は死なない」ともいえるわけです。これと似たような意味のことわざは「憎まれっ子世にはばかる」です。

問二 **B1** 具体化 比較

——線②を含む一文は「日本は『雑草』を愛する不思議な国だ」です。この「雑草」を愛する」とはどういう意味でしょう。——線②の直前に「日本のように害を及ぼす『雑草』を誉め言葉で使う国はない」とあり、直後にも「日本では雑草が、ポジティブなイメージを持って受け入れられている」とあります。ですから、「雑草」を愛する」というのは、雑草に良いイメージを持っているという意味です。ですから答えはイです。ア「雑草を人間がコントロールできるように」とありますが、日本人に自然をコントロールすることを認めている」ません。ウ「人間の役に立つ雑草もあることを認めている」のは日本だけでなく、中国・韓国もです。エ「雑草を自分たちの田んぼや畑の作物の生育を邪魔しない植物だと捉えている」とありますが、日本人も雑草はやっかいな一面もあるとは思っています。

問三 **B1** 具体化 比較

——線③の「実際にはその逆である」とは、直前の「ヨーロッパの雑草は日本の雑草よりも相当に手強く、やっかい」の逆、つまり、日本の雑草はヨーロッパの雑草よりも相当に手強く、やっかいだ、ということですが。これと同意の表現として、——線⑤の三行後に「雑草の生育の旺盛さから言えば、日本は欧米の比ではない」があります。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問四 **B1** 置換 関係づけ

——線④の直前の文が「くのだ」とあるので、「雨が少なく：少ないのだ」という文は、その直前の文の「ヨーロッパの耕作放棄地は何年も放棄された畑でも、雑草は少ない」の補足説明にあたることがわかります。「こんなこと」というのはこの二文の内容をまとめたものだと考えられます。**B**には「雑草がどんどん生い茂ること」と同意になる五字の言葉を探しましょう。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問五 **B1** 置換

——線⑤「高温多湿な気候にある日本」とありますが、本文において比べられているのは、日本とヨーロッパです。ヨーロッパの気候は——線③の四行後にあるように「雨が少なく冷涼で、乾燥した気候」であり、「高温多湿」と対照的です。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解と

します。

問六 B1 関係つけ 比較

接続語の問題ですから、前後の関係を読み取ります。

⑥の前の段落では雑草が「田んぼや畑の肥料としての利用価値があった」ことが書かれ、後では「菜っ葉として食用にできるものや、葉草として利用できるものも少なくなくなつた」とあります。

⑥の前後で、雑草の利用法がならべて書かれているわけです。ですから、ここには並列を示す接続語である「また」があてはまります。

問七 B1 具体化 比較

線⑦に「そういう表裏で物事を見る」とあり、これは、直前にもあるように「物事には良い面と悪い面がある」ということを踏まえた上で両面をとらえる、ということですが、

線⑦の二文前にあるように「雑草は邪魔者でありながら、役に立つという、矛盾を含んだ存在」ととらえる、ということとです。ですから答えはアです。エ「生えている環境を人間が完全に克服していく必要がある」とは本文に示されていません。イ・ウは雑草の「表裏」が示されていません。

問八 B1 理由 比較

線⑧「雑草は悪魔の小道具だった」のであるとあります。

これは直前の内容の言い換えになっており、そこには、「実りをもたらす麦は、神が与えてくれたもの：一方、小麦（神の恵み）の成長を邪魔する雑草は、悪魔が：タネをまいているのだと信じられていた」とあります。このことについて触れ

られているのはイです。

問九 B1 具体化 比較

線⑨の後を読みましよう。「江戸時代には雑草は単に

『草』と呼ばれていた：『雑草』という言葉が初めて使われたとき雑草という言葉は：いろいろなる草という意味で使われていた。日本では：『悪者』という言葉に『悪者』とあり、

外国では「雑草」という言葉に『悪者』というニュアンスがあります。日本には「雑草」という言葉がなかった、ということ、日本人は雑草に対して「悪者」、駆逐すべきものだとは思っていない、ということと、このことが説明できているのはウです。ア「草は人間が退治すべきもの」、イ「大事に育てられていた」、エ「植物を分類したり名前をつけたりはしなかった」とは本文中に書かれていません。

問十 B1 理由 関係つけ

線⑩の問題提起に対する答えになる部分を探しましょう。

最後の二段落に注目します。そこには、「これは、『草や木は：私たちと同じように、仏性があり、成仏する存在である』というものである。そして、それらを仏性のある存在として感謝し、供養したのである：植物さえ成仏するというこの考え方は：古くから植物の中にも命を感じてきた日本人にとつては、ずっと腑に落ちる考え方だったのである」とあります。植物の中にも命を感じてきた日本人にとつては、植物は人間と同じく成仏する存在だという考えはなじみやすい考え方だった。だから、人間と同じく、供養するべきだと考えた、

ということですが。植物も人間と同じく命がある、と感じていたから、「植物さえ成仏する」という考え方が受け入れられ、それらを供養していたのでしよう。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします

問十一 B1 具体化 比較

日本人にとつて、腑に落ちる考え方は、アの「草木国土悉皆成仏」という考え方」です。それは、ウの「植物さえも成仏する」という考え方でもあります。それと比べられているのは、「伝統的な仏教の考え方」、すなわちイ「植物を食べることは殺生ではないという考え方」であり、エ「修行してはじめて成仏できるという考え方」です。

3 A2 知識 比較

文脈を考えて、慣用句やことわざを完成させましょう。知らなかった言葉、自分で例文を作ることができない言葉については、辞書などで確認してください。

- ① 「とても喜んだ」と言っていることから、大好きだという意味の「目がない」があてはまります。
- ② 「水入らず」とは、家族など、親しい人ばかりで、他人がまじっていないことです。ア「根こそぎ」|| あるもの全部、すつかり。イ「手ずから」|| 自分の手で。自ら。ウ「気まぐれ」|| そのときの気分や思い付きだけでものごとをする
- ③ 「緊急事態下」に必要なのは、「臨機応変」の対応です。「臨

機応変」とは、思いがけないことがおきても、その場その場にあつたやり方をする。ア「付和雷同」|| 自分の考えがなく、他人の意見にすぐ調子をあわせること。イ「有害無益」|| 害だけがあつて、ためになることがないこと。ウ「枝葉末節」|| 本質からはずれた重要ではないこまごましたこと。どうでもよいこと。

④ 文脈から感心した、ということでしょうから、ここには「舌をまく」という言葉がはいります。

⑤ すばらしい手柄をたてたときに、得意になって喜ぶ様子をあらわす言葉は「鬼の首を取ったよう」といいます。

4 A2 知識 比較

述語による文の分類の問題です。アは「何がナンダ」、イは「何がドンナダ」、ウは「何がドウスル」の形の文です。述語を言いきりの形に直した時、「名詞十だ」か、「形容詞十だ・形容動詞」か、「動詞」かを見極めましょう。

- ① 「話し続けました」の言いきりの形は「話し続ける」です。
- ② 「かおりです」の言いきりの形は「かおりだ」。「名詞十だ」です。
- ③ 「おだやかだ」は言いきりの形になっています。「おだやかな」と活用させることができるので、これは形容動詞です。
- ④ 「中止だ」は言い切りの形です。「名詞十だ」です。
- ⑤ 「むかえたらしい」の言い切りの形は「むかえる」です。